

舞台からの退場

エリック・C・シャイナー

依田洋一郎は、その絵画の根幹にノスタルジアという魅惑的な世界を生み出している。描かれているのは、今や姿を消して久しいニューヨーク市の豪華な映画館のきらめきだが、亡きハリウッド映画の伝説的な人物たちが棲むその世界には、依田自身のこれまでの生涯の物語に由来する亡霊のような現代女性たちも侵入者として登場する。ニューヨーク市のタイムズ・スクエア近隣にある何十もの劇場をリサーチし、訪ね歩くことに何年をも費やした依田が、映画の殿堂たる劇場群の——そしてその痛ましい絶滅の——歴史に関するエキスパートであることは間違いない。たいへんな映画狂である依田は同時に、映画そのものの起源をも熟知しており、その知識は最初期のトーキー作品から最近作に至るすべてに及んでいる。とはいえ、彼の心はチャーリー・チャップリンのハリウッド時代とともにあり、その結果として彼の絵にはしばしばチャップリンが現れるが、それはおそらく、古い映画館が無数の観客たちにもたらした喜びの時代を示しているのだろう。だが、そのかつての観客たちの存在は、劇場を再生利用してつくられた異質のスペースに集う観光客や買い物客にとって替わられてからすでに久しい。その場所は、今やたいていは大きなチェーン・レストランやファッション・ストアになっており、この空間にかつてあった壮麗さは面影すらもうかがえない。

依田は、自身が描く劇場の物理的なスペースにとくに入念に注意を払い、丸天井やボックス席、椅子やプロセニウム（額縁舞台）に見られる装飾的な様相を描くことに集中している。彼の絵画様式は、おそらくはリアリズムとシュルレアリスムの間にあると言うのが一番いいだろう。全体的な印象では、描かれているのは現実の空間であり、容易に思い浮かべることができるものだが、それでもなお、依田の流れるような描線と移り変わる視点ゆえに、正常とはわずかに異なるズレがある。彼の用いる色彩の範囲もまた、観る者を空想的な領域へと少しずつ押しやっていく。赤と緑が頻繁に使われるが、その色彩は彼の創り出す画面上に、不安感と畏れの間を漂うきわめて緊迫したエネルギーを与えている。依田はさらに、背景となる劇場の室内や社交スペースに、舞台上で役を演じる俳優や女優たちの幻影のような姿を織り込むことで、自身の絵画の映画的な魅力を高めている。この人物たちは、今や見捨てられてしまった劇場の威厳に満ちた壮麗さの内に自らの王宮を維持しており、そのために作品を観る者たちは、過去へと思いを馳せずにはいられない。そしておそらくはさらに重要なことに、眼前に繰り上げられている光景へと、空想を遊ばさずにはいられなくなるのだ。

そして、この点こそが、依田の絵画が最も強い力を持つところだろう。

選び抜いたシーンを描いた彼の絵は、観る者の想像力を喚起させる力に満ちた魅力を持っているが、そのシーンは、彼自身の想像力と、またこれらの劇場が破壊されてしまう以前に彼が直に目撃したきわめてリアルな状況とを、等しく用いて生み出したものだ。都会の考古学者とも言える依田は青春期の多くの時間を費やして、42丁目の閉鎖された劇場群や、成人映画の上映など尋常ではない用途に使われていた劇場の中に入る方策を見つけ出そうとした。建物の管理人や建設現場の労働者たちをはじめ、ニューヨークという彼の住み慣れた故郷の街で、かつて栄華を誇った映画館の中へと入る許可をくれることのできる者であれば誰とでも友人になった。ひとたび中に入れば、彼は建物のすべての空間を調べ、古い映写機や機材、そして映画が持っていたありし日の活力の豊かさをうかがわせる広告板やカレンダー、文書資料といったものを見つけ出した。これらのスペースを写真に撮ることに加え、依田はまた、この亡霊たちの世界への訪問の多くをビデオテープに録画した。その結果、映像の膨大なデータベースを構築することができた彼は、今はそれらを自身の絵画制作のインスピレーションを得るために、そして具体的な世界を描き出すために用いている。

現実にある建物のスペースに、昔そこで上映された映画の人物たちの姿を織り込むことによって、依田は、かつては非常に多くの文化的な影響力を持ちながらも、もはやいかなる次元でも存在しなくなってしまった世界について再考察する。もちろん、今でも人は自宅のDVDで、チャップリンの古い映画を見ることはできる。しかし、かつてと同じ意味を持つものとして見ることは、もはや不可能だ——荘厳なる映画館で、生音楽の伴奏つきで、そしてビッグアップルというニューヨークの中心街で見ることは。また依田は、彼自身の人生に関わった女性像を描き込むことによって、さらにいっそうロマンティックなイメージをも生み出している。彼女たちは、かつて彼が恋心や憧れを抱いた女性の場合もあるが、たとえばローラーゲームのチームメンバーのように、ただ影ながら心服しているタフな女性たちという場合もある。依田の作品は歴史性を感じさせるものだが、そこにこのようにきわめて現代的な女性たちを挿入することによって、それぞれのシーンの中で起こっている物語をさらに推し進め、彼を夢中にさせている過去の歴史と、今ここで生きられている彼自身の物語との間の境界線を消し去っているのだ。

依田の絵画では多数の劇場がその主なテーマとなっているが、それに加えて彼はまた、ニューヨーク市のペン・ステーションの向かい側、7番街の32丁目に建つホテル・ペンシルベニアの歴史的調査にもこだわってきた。依田が描く劇場群と同様に、かつては壮大で豪華だっ

たこのホテルもまた、困難な時代に陥っている。今やニューヨークの中心街にあって安価な部屋を提供する経済的なホテルとなり、その華やかな過去の名残はしばしばパーティションや新しい壁の背後におおい隠されてしまっている。しかし依田は、そのホテルのありし日の姿を再び思い描き、その空間の中に、まるで重要な宿泊客でもあるかのように自身の生み出した人物たちの顔ぶれを配している。ホテル界におけるこの往年の巨人に関する献身的な探求を通じ、またもや依田はニューヨーク市のいにしへの歴史を提示し、またそうすることによって自らが、画家であると同時に歴史史料の編纂者ともなっている。

このような二重性の結果、依田洋一朗は、ニューヨーク市と、さらにもっと大きな世界の双方について、その集団的な潜在意識に直接つながるような絵画の創造者となりえている。交響楽のコンサートであれバレエであれ、その舞台となる絢爛たる劇場ホールで過ごした経験がある私たち観る側も、彼の絵とはたちまちのうちにつながりを持つことができる。しかも、世界中で親しまれているハリウッドの銀幕を象徴するスターたちが描かれているおかげで、さらにいっそう絵の中に引き込まれていくのである。絵の具の扱いにおける才気あふれる筆触と、不思議に華やかな装飾性のゆえに、彼の絵は視覚的な魅力を持つ神秘的なものとなっており、観る側としては、こんな素晴らしい環境を持つ劇場に座って、眼前のスクリーンに映るお気に入りのスターたちの姿を見るのはどんな気分だったのだろうかと思いをめぐらすことになる。もちろん私たちは、今日でも映画館に行くことはできるが、空間的な華やかさに劣るのは確実だ。だが、ディテールに対して綿密な心遣いを見せる依田の絵を観ていると、私たちは過去というものを信ずる気持ちを強くする。私たちも、みんないつかは舞台から退場し、過去の者となるのだから。

(ペンシルベニア州ピッツバーグ アンディ・ウォーホル美術館館長)